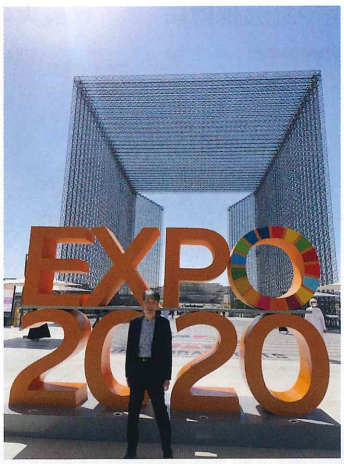
大阪を世界が憧れる街に 大阪・関西万博を機に浮上を！

大阪公立大学研究推進機構特別教授
大阪公立大学観光産業戦略研究所長
橋爪紳也氏

大阪市立大学と大阪府立大学で創造都市や都市文化施設、商業施設など総合的な研究を展開。観光政策の立案や市民参加型のまちづくり、地域ブランディングなどを幅広く実践してきた。大阪の建築研究や都市文化論の第一人者であると同時に、大阪を世界に向けて飛躍させる、まちづくりの仕掛け人が橋爪紳也氏（61）だ。近年は2025年開催の大阪・関西万博や、大阪の将来構想立案に取り組んでいる。

都市研究のきっかけは、大阪ミナミの盛り場に生まれ育ち、都心が空洞化するのを目の当たりに見てきたこと。「街は新陳代謝する。5年、10年で街のあり方も基幹となる産業も絶えず変わらないとその街は衰退する。大阪が難波宮から1400年の時を超え、都会として栄えてきたのは、絶えず外から人が集まり、学び、業を起こし文化を生み出し生活してきたからだ」と強調する。



ドバイ万博で

近代の大阪は産業都市として発展、内外から多くの人が集まり「東洋一の商工都市」となった。故郷である大阪をふたたび、世界の人が憧れる魅力ある街とする実践が、最大の研究テーマだ。大阪市都市計画審議会会長として御堂筋の空間再編も手がけた。オフィスビルの建て替えを促進するため、街路に面して上質な店舗を誘導、上層部にハイグレードなホテルを誘致し、かつてのオフィス街がアジア有数の魅力ある目抜き通りに転じつつある。

「水と光のまちづくり」にも取り組み、水害への備えから河川空間にアクセスができなくなっていた水辺に、北浜や中之島周辺などで、新たな賑わいと美観を生み出すべく規制緩和に尽力。大阪光のまちづくり委員長も担い、魅力ある夜景の創出も継続している。

2002年に発表した「集客都市論」が原点。人が集まらないと都市の持続的な発展はない。日本は少子高齢化の傾向にあるが、世界では人口爆発が起こり、国境を越える人が急増することを予測。国際化を推進し、インバウンドの観光客を受け入れないと、都市は生き残ることができないと警鐘を鳴らした。

そのためには物見遊山の観光客だけでなく、企業の会議などMICEのビジネス客、留学生、イベントや食事、買い物などに来る人など、さまざまなビジターを増やすこと、すなわち新たな「集客」の創造が、人口減少期における都市再生の鍵であると強調した。

最新の研究主題は、ポスト2025年大阪・関西万博における大阪都市圏域の将来構想。大阪府・大阪市・堺市で描く、新たなグランドデザインの構想を練る懇話会の座長役を担う。今、私たちは戦後復興期から高度経済成長期の人口急増期に構築した産業都市を、根幹から改める段階にある。

計画中のプロジェクトにも関与している。一例が、大阪公立大学の新キャンパスがトリガーとなる森之宮エリア、リニアや北陸新幹線などが乗り入れることを契機に抜本的に街の変革が求められる新大阪エリアなどだ。また大阪・関西万博の跡地を含むベイエイリア一体も、新たな国際観光拠点として将来像を描き直す作業が求められる。

今秋開催予定の「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」実行委員長として海外視察。バルセロナの「オープンハウスバルセロナ」の委員長と

大阪・関西万博では、誘致案の策定に尽力、現在は大阪出展のほかテーマウィークの企画立案に関与している。また兵庫県全体をひとつのパビリオンと見立てて、会場との連携をはかるフィールドパビリオンにあっても中心的な役割を担う。

大阪・関西万博を実施することが目的になってはいけない。国際博覧会を一過性のイベントに終わらせないためにも、今後、20年、30年を視野に入れた将来像を描きつつ、万博をその端緒と位置づけなければいけない。また、大阪が国際的な祝祭気分に包まれる2025年を、子どもたちが国際感覚を育む好機としたいともいう。関西から世界に飛躍する次世代を担う人材を輩出することが万博最大のレガシーであると持論を展開する。

はしづめ・しんや：1960年大阪生まれ。都市計画学、建築史学、都市文化論専攻、工学博士。京都大学大学院工学研究科修士課程修了、大阪大学大学院工学研究科博士課程修了。2006年大阪市立大学都市研究プラザ教授、文学研究科教授。2008年大阪府立大学産学官連携機構特別教授、同大観光産業戦略研究所長。大阪府特別顧問、大阪市特別顧問、大阪市都市計画審議会会長、大阪府河川水辺にぎわいづくり審議会会長。著書は『日本の遊園地』（講談社現代新書）、『大大阪モダニズム遊覧』（芸術新聞社）など100冊を超える。日本ディスプレイデザイン研究賞大賞、日本観光研究学会賞、日本建築学会学会賞など受賞。